82
533

風流無邊一茶俳句二色評

昭和
44. 8. 12
内交

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

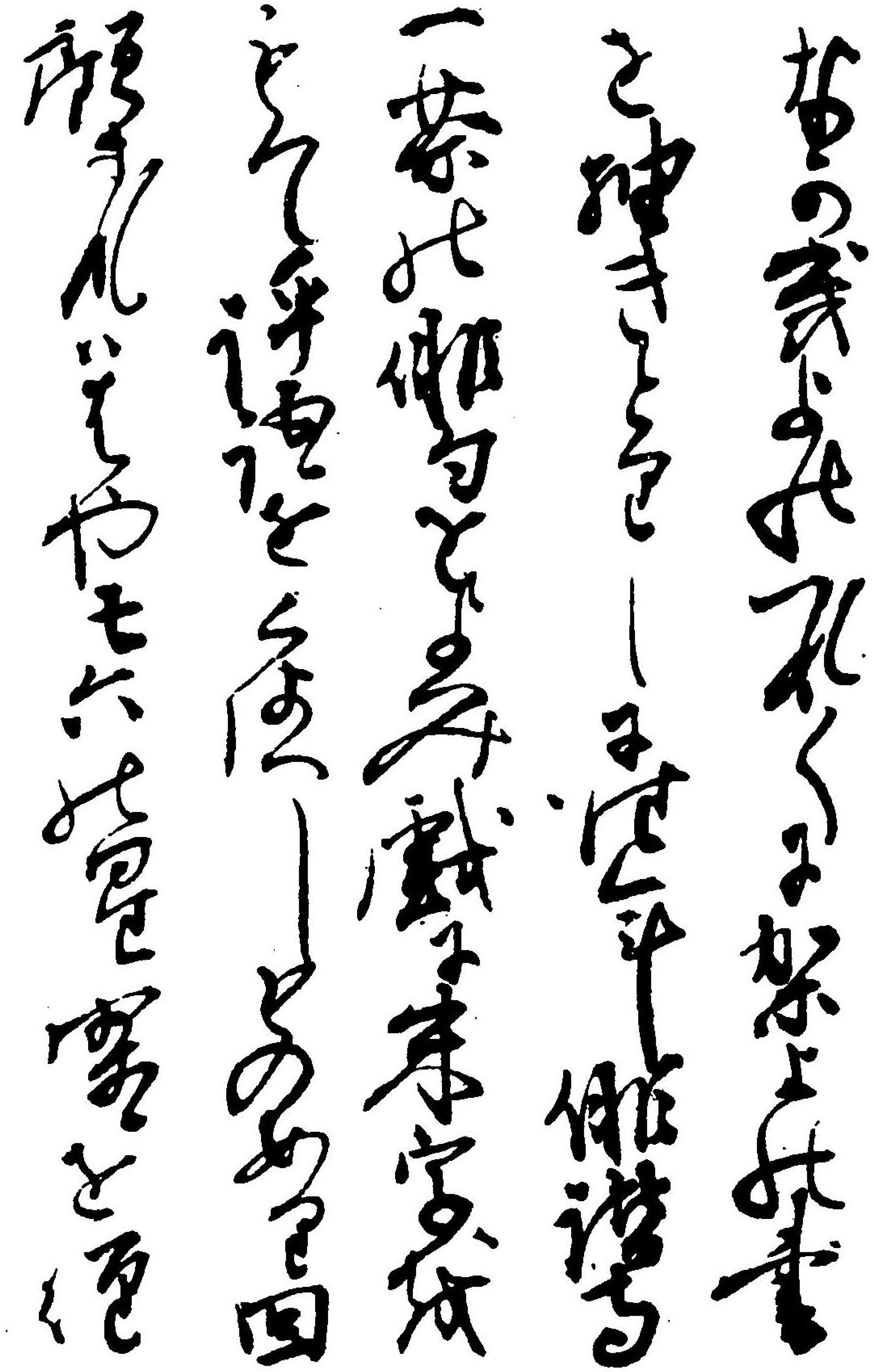
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]先生

[illegible]



此の書簡は、嘗て陶菴西園寺公望侯より、故[illegible]渡邊千秋伯に寄せられたるもの、侯伯が特に編者の請ひを容れて、此に掲ぐる事を許されたるは、編者の最に欣幸とする所なり。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

明治四十三年十二月廿二日

[illegible]

[illegible]

82-733

俳諧寺一茶と伯子とに就て

思ふ事五則

一、信州の名物として算ふ可きもの、一寸八分の善光寺如來あり、不斷の熱火を吐いて人心を提醒する淺間山あり、到る處に出店の多き更科蕎麥あり、夏でも寒い木曾の御嶽あり、故人に義仲、幸村、象山あり、名物としては、可なり旨くもあれば、偉らくもあるが、吾輩は名物中の名物として俳諧寺一茶を推稱する。

一、俳人として偉らい者には、開山の芭蕉を筆頭第一として、其角に凡兆に、鬼貫に嵐雪に、蕪村に曉臺に、白雄に大江丸に、皆夫れ〳〵の異色ある俳人であるが、吾輩は偉らい俳人中の偉らい俳人として、一茶を擧ぐ

る事を禁じ得ない。

一、一茶の最も偉らい所は、巧みに俗談平語を捉へ來つて、之れに血と涙とを濃いで、滑稽諷刺の別天地を開拓した伎倆にある。此の點に於て、彼は眞に古今獨歩である。則ち一茶の俳句を讀んで居ると、不思議に頭が輕くなる。悲哀の裡にも快感があり、不平の間にも慰藉がある。一茶は確かに日本の誇りとし、珍とす可き詩家である。

一、而してまた楓關渡邊千秋伯と無邊渡邊國武子とは、當代に於ける信州の名物中の名物であり、人物中の人物である。殊に忙中閑あり、楓關伯の和歌に巧みなる、無邊子の漢詩に長ぜる、以て其の人と爲りを想見するに足る。加之俳句に就ても亦一流の眼識を備へて居り、多少の名什佳吟もある。伯子は確かに信州の誇りとす可き異草であり、日本の珍とす可き名華である。

一、此の誇りとし珍とす可き一茶の俳句に對し、また此の誇りとし珍とす可き伯子が、縱横の批評を加へたものは此の書であつて、曩に楓關伯が同好の人々に頒たれたものである。讀んで見ると、朱評には自ら楓關伯の氣品が現はれ、青評には自ら無邊子の風格が知られて、原句と照らし來れば、啻に興趣の湧然たる

ばかりで無く、座右の規箴とす可き警策も尠くない。

値に限られた人々のみの、懷ろ兒として置くのは惜いと思つた。則ち特に請ふて、廣く天下に頒つに至つた所以である。吾輩の加へた批評の批評は、素より蛇足に過ぎぬ。

青時雨十四年六月中ゝと新聞雀時鳥福の青嵐に對して

亞浪生

一茶俳句兄弟二色評

朱色　楓關　渡邊千秋伯評

青色　無邊　渡邊國武子評

亞浪　白田卯一郎編

月淋度さもなう位なりおらが春

白不轉自由氣格睥睨宇宙而志則安其分。

自嘲自笑不是樂天不是厭世逸氣超然。

格調よりするも措辭よりするも、一茶の眞面目を最も克く反映せるものは卽ち是れ。而して伯子の評語また一字の加ふ可きもの無きも、唯だ余は一茶が『ちう位なり』と告白せる其の胸奥に、慘憺たる境遇の黑き影を認めて、涙痕未だ乾かざる乞食坊主の泣き笑ひを聯

惜せずんばあらず。惟ふに無邊子が會心の一句ならん。句あり

「羽子手毬娘の春の長者振り」

○

元日も立のまんまの屠屋かな

安心立命。不願他。眞丈夫本領。

庭前に松あり、屋後に竹あり、自らにして偽らざる元日の風趣を觀る。

句あり「此の松に此の竹に春來りけり」

○

こぞの五月生れたる娘に一人前の

雜煮膳を居ゑて

道へ笑へ二つになるぞけさからは

倫情敦厚。待其成育。道俗一致。

天眞爛熳。如嬰兒語。

一茶の子煩惱は此の一句に盡く。此の時此の際、大人たる一茶も、慈父たる一茶も是れ無く。唯だ唯だ小兒の大人化せる小兒あるのみ。子福者たる楓園伯が、閑楊に凭つて此の句を誦し來るの時、必ずや其の唇頭に微笑の湧くを禁ぜざらん。句あり『のゝさんと青の子のいふ初日哉』

○

ことしからまる儲ぞよ娑婆の空

病愈迎年。而有此句。眞知天命者。

余は此の句に對して、無邊子の評語無きを憾みとす。無邊子前年俄かに病んで、數次不祥の途說を傳へられき。而も次第に癒えて、今や伊豆山莊に閑鶯を侶として、靜かに詩腸を養はる。曾て來翰の端に

句あり『初鶏やのたり〳〵と伊豆の海』

○

とし男つとむべき僕といふものも
あらざれば

名代にわか水あびる烏かな

一佛説法百鳥捧花。

伯子の令妹高山未亡人の尚ほ信中にあつて、寒苦と闘はれつゝある
の時、雪の降り降る中に、愛兒を背負ふて、薪を樵れる美談あり。知ら
ず其の頃、名代に若水浴びる烏のありしや否や。句あり『鶯の水浴
びるぞよ跳ねるぞよ』

○

水江春色

すつぽんも時や作らん春の月

奇想自天外落。

明治辛亥初頭、鮮人の歌、還に入る。(すつぽん最も多く朝鮮に産す)又
曰く、海女が戀は甘くして而して辛し。句あり『春の夜や潮たれ衣
かたしきて』

○

善光寺堂前

灰猫のやうな柳もお花かな

空前絶後傑作。

灰猫のやうな柳も尚ほ佛心あり。猫も杓子も、皆是れ善男善女。句
あり『南無有り難の花咲きぬ御堂前』

○

さくら〳〵と唄はれし老木かな
年々歳々花相似。歳々年々人不同。眞唐
詩遺音。

此の句の生命は、措辭の巧妙なるに在り。移して以て當代の諸老に質す、誰れか楓關伯と其の感を同じうせざる者ある。句あり『伴奴が植ゑた櫻の盛りかな』

○

櫻へと見えてじん〳〵端折かな
遙見人家有花入。不論貴賤與親疎光景。

演じ來る忠臣藏の一幕。師直は是れ村長、由良之助は是れ校長、判官は是れ村會議員、お輕は是れ銀行の女事務員。句あり『目鑑の人誰れ誰れぞ夕櫻』

○

初午
花の世を無官の狐鳴にけり
諷刺無限趣。

之れを政界の事に見る。無官の狐は夫れ失意の政治家乎。其の鳴くや或は妬婦の如く、或は悍婆の如し。句あり『糞やけに叩く稲荷の太鼓哉』

○

葎からあんな胡蝶の生れけり
豐公漢皇皆然。

豐に夫れ豐公漢皇のみならんや、楓關伯無邊子亦然り。信州諏訪湖畔の長地村は、此の大なる胡蝶の飛び出せる葎なり。句あり『蝶二

つ大河を渡りあふせけり』

○

上野遠望

白壁の詩られながらかすみけり

難解。

楓關伯の難解と評せる所以のもの、或は『上野遠望』と題せる前書の存するが爲めならんも、句意は卽ち擅私横暴なる權門富家を諷せるに過ぎず。惟ふ當代此の類の人稀れに在り。句あり『古家のべん〳〵草を憐れめり』

○

花の陰あかの他人はなかりけり

四海皆兄弟。

花の陰之三字。未達妙旨。

何れか王土にあらざる。君は是れ民の父、民は是れ君の子。一樹の蔭に圍繞して、謠ひ且つ舞ふ太平の曲。句あり『花の宴高麗人醉ふて舞ひ出でぬ』

○

二月十五日

小うるさい花が咲迚寢釋迦かな

世の憂さを花に忘れて又一つ苦勞求

むるあすの山風

『小うるさい』と思ふは俗人の事にして、『あすの山風』を憂ふるは達人の事にあらず。句あり『涅槃會や猫も杓子も御弟子面』

○

み佛や寢ておはしても花と鏡

排斥尸位素餐之徒輩。

末世の坊主共は、唯だ唯だ一卷の經文を誦んずれば足る。則ち供物自らにして到り、布施自らにして集まる。句あり「花時は酒も賣らする御寺かな」

○

玉川

さらし布霞の足しに舞えけり

風趣宛然。

此の霞を喫へば仙人となり、此の布を着れば俗人となる。句品また然り。句あり「蝶々や霞に入れば何の鳥」

○

思ひきや下萠いそくわか草を

野邊のけふりになしてみんとは

難解。

平凡。

此の歌、俳文「野邊の烟」の中に在り。妙專寺の小坊主たか丸の横死を悼めるもの。

○

獨坐

おれとしてにらみくらする蛙かな

罵爭名競利的狀態得盡。

競爭は邁歩を意味す、必ずしも非議す可からず。唯だ其の他を傷つけ、他を陷し入るゝに至つて、彼は名利の走狗たり。斷じて之を斥く

可し。句あり『負けじとて烏打つ聲と聲と哉』

○

梅の花こゝを盗めとさす月か

有喬木當風之概。

盗めば卽ち人の子を害なひ、盗まされば卽ち人の世の戀を捨てざるを得ず。盗ひが是か、盗まざるが非か。句あり『戀猫の盗める鮭の頭かな』

○

大猫の尻尾でなぶる小蝶かな

似列强制弱邦。

此の大猫は、夫れ何れの國をか指し、此の小蝶は、夫れ何れの國をか指す。句あり『蝶々を爭ふ黑と三毛とかな』

○

餅腹をこなしがてらのつぎ穗かな

茶翁一生本色。

長者三代なし。其の子の其の子、此の柿を賣つて遊蕩の資に充つ。句あり『お茶腹をこなして歩行く日永哉』

○

今の世も鳥はほけ經鳴にけり

歎世之澆季。

雀は忠々と啼き、鴉は阿房々々と鳴く。句あり『日一分々々々と稼ぐ燕哉』

○

馬までもはたご泊や春の雨

春雨蕭瑟的逆旅光景。如畫。

平家を語る者は是れ禪家の人、嗚咽して聽く者は是れ當年の虎將軍。句あり『お供衆は歌舞伎見に行く宵の春』

○

雀の子そこのけ〳〵御馬が通る

嘲殺封建時代侯伯專横。

此の句一茶にして始めて詠み得べし。其の慈眼より溢れ落つる紅涙凝り成して此の句あり。恰かも是れ我が國が貧弱なる鷄林を其の温かき懐ろに抱いて、將に裂かんとせる暴鷲の利爪を免れしめたるにも似たり。句あり『親馬に踏まれさうなる薹哉』

○

かすむ日やしんかんとして大座敷

春日光景。寫得穩健。

敍景詩の上乘なるもの、一面三嘆の値ひあり。椽先に眠りこけつゝあるは、是れ愛護秘藏の大猫。句あり『廻廊に續く菜種の畑かな』

○

京島原

入口のあいそになびく柳かな

此等俳句可厭。

時に或は厭ふべく、時に或は厭ふ可からず。句あり『春の夜や二階で招く隣の子』

○

なぐさみにわらを打つ也夏の月

世人欲言而未能言者。

其の子慰みに博奕を打つて、遂に田を賣り、家を賣る。句あり『親馬鹿の子馬鹿のと納涼話哉』

○

五月雨も中休みかよ今日は

似明治壬寅七月。呵々。

曰く革丙將軍高島子、曰く權兵衛大臣山本伯、曰く無邊俠禪波邊子、皆是れ鬱勃たる覇心を抑へて、中休みの一吹を試みつゝあるの人。句あり『寡默々として楠のうつろ哉』

○

ちりの身とともにふは〳〵紙帳哉

當今之世無不然。慚愧々々。

今日の紅顏子、明日は白頭翁と化し了す。句あり『風の吹く方へと納涼み歩行きけり』

○

小座頭の天窓にかぶる扇かな

意想天外。

一場の滑稽。丸髷結ふて大人振れる雛妓の其れにも似たり。句あり『踊子が揃ひの日傘袂かな』

○

はつ瓜を引とらまへて寢た子哉

敍稚兒天眞。無餘蘊。

一夜褥中に大洪水あり、惜ひらくは此の瓜遂に何處へか流れ去る。句あり『短夜を坊やの瓜の行衛かな』

○

今迄は罰もあたらず蚤蝨蚊屋

尺璧非寶。分陰可惜。

笠して曰く、病未だ膏肓に入らず、僕未だ家を滅ぼすに至らず、此の子尙は敬ふ可きなり。句あり『知らぬ間に牡丹崩れて仕舞ひけり』

○

世がよくばも一つ泊れ飯の蠅

如待財政整理。至妙々々。

今時の三稅廢止論者は、一茶の乏しき飯椀にとまれる蠅にも似たり。其の愚や及ぶ可らず。句あり『貧乏な家とし見れば蠅群るる』

○

幽栖

蟲に迄尺とられけり此はしら

弱肉强食可恐。

老俠嘆ずらく『俺も斯う脚下を狙はれるやうになつちやあ最う駄目だ哩』。句あり『夏痩し奴が毛脛憐れなり』

○

花つむや扇をちよいとぼんのくぼ

好諧謔。

今の世、野幇間一輩に往々此の醜態を見る。風流に似て而して非なるもの、唾棄すべきのみ。句あり『風流は蝸牛の書くのの字哉』

○

戸隱山

居風呂へ流し込たる清水かな

深山佳興。夏日猶忘暑熱。

宮司の娘芳紀二八、此の夜川中島の寺家に嫁く。句あり『掣引出山百合折つてまゐらする』

二〇

○

一つ蚊のとまつてしくり〳〵かな

碧紗幬裏苦。説得妙。

苦中樂あり、樂中苦あり。富者は須らく貧者に同情するを要し、貧者は餘りに富者を羨望せざるを要す。句あり『妬ましのよそ降る雨や竹婚人』

○

越後女旅かけて商ひする哀さを

麥秋や子を負ながらいはし賣

至痛々々。

恐らくは是れ夫を喪へる漁家の一寡婦。兒の俄かに泣き出せるは、想ふに其の父をや夢みし。閨女句あり『負うた子に髪なぶらるゝ暑さ哉』

○

子子の天上したり三日の月

奇想。

氏無うして玉の輿に乘れる美婦にも比す可く、眞に奇想天外より來れるもの。句あり『橘の香や伊達殿の迎ひ駕籠』

○

思ふまじ見まじとすれど我家哉

有恆産者有恆心。

超邁雄逸之士。亦有時憂國慨世者。人情

之自然也。

家を愛するの心は、即ち國を愛するの心なり。滔々たる懐郷病者は似て而して非なる者のみ。句あり『杉の奥の灯火に暗け杜鵑』

○

あまひらをおとろかさしと青麥に
　ほとよき風の吹すくるかな

方言歟。難解。

『あまひら』は、かはひらこ(蝶)の轉訛せるものにあらざるか。

○

日々懈怠不惜寸陰
けふの日も棒ふり蟲よ翌もまた

滔々天下皆然。

元來牡丹餅は棚に無し、棚に載せて始めて在り。食ふて寢て起きて、徒らに棚の牡丹餅を俟つの徒は、棒ふり蟲の類ひのみ。句あり『蚊柱の今日もおんなじ所哉』

○

無限欲有限命
此風に不足いふ也夏座敷

此一字。包十六字。

奇警

此の輩成り上り者の子女に多し。竟には成り下つて、汗に泣き、歌に泣く。句あり『蜩弔れば蜩の中でも鳴く蚊哉』

○

心に思ふことを

松陰や寢座一つの夏座敷

尋常。

心は襤褸に包まれて身は錦繡に蔽はるゝ者と、身には襤褸を纏ふて心には錦繡を著る者と果して孰れぞ。句あり『此の蟲が彼の綾絹が靈となる』

○

片息になつて遁入る螢かな

世上回首多々不盡。

幸ひするも禍ひするも、唯だ晷れ尻の光りに在り。追ふ人必ずしも得ひ可らず、遁入る螢必ずしも憐れひを要せじ。句あり『其の中で美しの芥子盗まれし』

○

大螢ゆらり〳〵と通りけり

（大男總身に智恵が廻りかね）孰是非。

涼味可掬。

大男用ふ可く、小男用ふ可し。荒草離々たる原頭の闇を貫いて燦然たるは、星か、そも螢か。句あり『夕納涼山三はきりゝよい男』

○

田中川原如意湯に晝浴みして

なほ暑し今來た山を寢て見れば

旅情眞然。

『なほ暑し』の五字厭味あり、其の苦を懷ふは即ち一段の涼味を感ずる所以にあらざるか。句あり『あの山の清水湧く寺を思ひけり』

○

かくれ家は蠅も小勢で暮しけり

與顏回陋巷一般。

子供等の多き事、鮫ヶ橋、萬年町に如くは無し。嗚、一茶坊人を欺く。

句あり『蚤も蚊も皆子澤山の暑さ哉』

○

ひいき鵜は又もから身で浮みけり

力士梅谷。失脚一番。

明治四十四年の春場所、常陸山遂に太刀山に破らる。句あり『血ま

みれの軍鶏いたはるや暮の春』

○

はなれ鵜が子のなく舟にもどりけり

翁忘世。而不忘情。

句態の凡否を問ふ勿れ、唯だ其の情味を掬せんのみ。千代女句あり

『蜻蛉釣り今日は何處迄いんだやら』

○

ゆうぜんとして山を見る蛙哉

悠然見南山。是陶潛辭。十七字殆相似。

あゝ悠然として山を見る蛙哉、予は最も蝦蟇の悠々迫らざる態度を

愛す。句あり『蝸牛や雷が鳴らうが雨降ろが』

○

そんじよそこ爰と青田のひいき哉

俚言方語。恨不解。

『そんじよ』は、其處の轉訛せるもの。李兵衛田五作夕顏棚の下に對座

して、今年の豊凶を論ず。句あり『夕立を褒めてゐるなり風呂の中』

○

寢並んで遠夕立の評議かな

世之助理想往々如此。不如蹶起一番。井泉一潑。新凉可掬也。

寂然たる書生部屋の一幕。流汗淋漓たる村老野媼の田の草を取れるは、是れ其の第二幕。句あり『其處行くは村一番の浴衣かな』

○

蓮の葉に此の世の露は曲りけり

信佛陀者。可服膺。

詩味か、あらず。禪味か、あらず。厭味か、余は然りと答へん。句あり『蓮の葉の露吸ふたらば何佛』

○

魚どもや桶ともしらで門涼み

人世如逆旅。不誰讀此句。而起警念。

三界無安。猶如火宅。一切衆生。遊戯三昧。

侍座する羅妓に命じて、更に求むる鯉こく一椀。句あり『緑日であすは賣らるゝ牡丹哉』

○

關守りの灸點はやる梅の花

如有趣味。而恨不解。信北關門。有此實況否。

老梅の勁健なるに對して、百年の壽を希ふ關守の灸點を捻出し來る。詩趣湧くが如し。句あり『養生に青麥を踏むあした哉』

○

人聲に子を引かくす女鹿かな

比之體。上乘。

慈母の溫情句表に溢る。敵にして迫らば、必ずや其の身を捨てゝ反噬せん。句あり『日覆ひも添竹もして菊の花』

○

はつ蟹其手はくはぬとびぶりや

妙。

鬼をも挫がんず六尺の男兒漢、風にも耐へぬ柳腰の婦女子に顧弄せらる。句あり『釣り落す緋鯉に汗を拭ひけり』

○

蓮の花すこし曲るもうき世かな

看破人世而不憤。翁胸中光風霽月。

徒らに世を憤り人を誹るは、未だ修養の足らざる者。また曰ふ、詩は理窟を忌む。句あり『藪中の若竹どれも眞つ直ぐに』

○

大沼

萍の花からのらんあの雲へ

余曾奉職京都知事日。一日遊伏見。大池泛舟。讀此句憶起曾遊。

楓關伯今臺閣に在り、卽ち『あの雲』に乘り得たる者。句あり『涼風も虹も生るゝ湖上かな』

○

越後

柿崎やしぶ〳〵鳴の閑古鳥

似和歌掛詞。俳家宜避如此字。只要眞摯

率直。

伎巧に過ぐれば、却つて句意を沒了す。豈に曾に詩文の事のみならんや。句あり『海苔卷きの淡きがよけれ鮓の味』

○

江戸住居

青草も錢だけそよぐ門涼

豈啻草也。人事百般。以黃白動矣。黃金不厚。交不深之類。翁見世情。實巨眼。

植木に綠日物あり、人間に綠日男あり。綠日は是れ宛然たる嘘でまるめた人世の活畫圖。句あり『嘘を賣り嘘を買ふ市の暑さ哉』

○

小金原

母馬が番して呑す清水かな

慈母育兒。宜如此。

現代少年少女の稚態を描いてヤンヤと喝采せらるゝ者小波伯父さんあり。而も尙ほ未だ一茶の神に入れる妙手に及ばず。句あり『撫子を簪の花に贈るべう』

○

疫病神蚤も負せて流しけり

愉快々々。

暴吏あり民を虐ぐる酷だし、遂に其の罪を問はれて刑せられ、與黨また悉く罰せらる。句あり『鯨網に河豚も海月もは入りけり』

○

櫻迄悪く言はする藪蚊かな

新聞辯護的光景。

清盛の横暴は悪む可きも、重盛の恪勤は欣す可し。混同するは斷じて非なり。句あり『雪隱のそばに湧き湧く清水哉』

○

蚤の迹かぞへながらに添乳かな

亦是慈母眞情。

無限慈愛。無限細心。一句道破。

『あゝ可哀さうに、大變喰はれて、憎い蚤だ事ね』と母は蚤の迹に一々唾を塗りつけて擦りやる。句あり『夏痩女世帶の苦勞ばかりかは』

○

蓬萊になんむ〳〵といふ子かな

敍反射實態。而寫稚兒心情。一茶翁家學也。

與次句照應。眞情實景。

蓬萊に配するに、神の兒たる小童を以てす。句品また超凡。句あり『注連飾り子供は神の兒なりけり』

○

年問へば片手出す子や更衣

名月を取てくれろとなく子哉

敍尋常事。生非常味。

同じく圓きも、饅頭は凡となり、銅錢は俗となる。又曰く四つ五つは可愛い盛り、七つ八つは憎まれ盛り。句あり『ぢゝばゝに褒めても

らふた拾哉」

○

あこが餅〳〵とて並べけり

妙。

凸坊慾張つて曰く『之れは僕のおかちん、之れも僕のおかちん』句あり『餅搗や手傳に來る親子連れ』

○

涼風の吹く木へ縛る我子かな

わんぱくや縛られながらよぶ螢

二句。共絶唱。

第一首眞情可掬。第二首天眞爛熟可喜。

敢て問ふ、當年政界の腕白者たりし無邊子の幼時、果して此の事ありしや否や。句あり『親心蚊帳弔つてなほ蚊遣かな』

○

鹿の親笹吹く風にもどりけり

生物皆同。

世往々其の子を賣り、其の子を棄つる者あり。須らく此の鹿の糞を煎じて飲ますべし。句あり『棄兒泣く稲荷横丁の暑さ哉』

○

小夜しぐれなくは子のない鹿に哉

凄絶使人泣者。

馬琴の梅柳新書一篇、最も克く愛兒を亡ふたる慈母の心情を描く。句あり『杜鵑梅若の塚動くめり』

○

黄ふよりはやくうしなふ扇かな

杜工部新婚別長篇酷似。暮婚晨告別。無二乃太忽忙一。

絶妙好辭。

此の句失ふも惜からず、此の扇失ふも亦惧みなし。句あり『あちら向いて納涼む昔の女哉』

○

曲者隠れてうかゞふ圖

あはれ蚊のついと古井に忍びけり

緑林豪客。機智有餘。巨商富賈。須二注意一。

あゝ二本榎事件の犯人、大久保事件の兇賊、今何れの處にか潜める。句あり『五月雨や親子地蔵に養蓄せん』

○

子を思ふ闇やかはゆいく〳〵と

聲をからすの鳴あかすらん

哀傷無二極一。

一茶の俳體歌、採る可きもの幾んど是れ無し。

○

御成り場所に鳥どもの餌蒔をした

ふ不便さに

人昵き鶴よどちらに箭があたる

國民宜二慰臺灣守備隊斃討匪之遺族一。

熱時熱殺、冷時冷殺は邦人の通弊、今日尚ほ癈兵、遺族に同情の紅涙を灑ぐ者果して幾人ぞ。句あり『鹿の子の矢疵憐れむ樹蔭哉』

○

九輪草四五りん草て仕舞けり

制節謹度。

菜根譚は三分の俠氣と一點の素心とを說く。余は更に幾許の餘裕を人に求めんと欲す。此の句味ふ可し。句あり『酒の味微醉に飲めば涼しかり』

○

鎭西八郎爲朝人礫をうつ所に

時鳥蠅蟲めらもよつく聞け

屈平離騷經遺響。

佐々木蒙古王數次下院議場に敵意を罵る。其の音吐破鐘の如く、其の體軀巨象の如し。句あり『どら聲で啼くは殿樣蛙哉』

○

老翁岩に腰かけて一軸をさづくる

圖に

我汝を待こと久しほとゝぎす

凡庸々々。

不必然。蓋題石公張良圖也。假杜鵑以贊。

茶翁一家老手段可誦。

此の句移して以て忠臣藏の一節に題するも可し。あゝ『遲かりし由良之助』。句あり『あで人の來ぬ日を牡丹崩れけり』

○

二三遍人をきよくつて行螢

飛螢其手はくはぬくはぬとや

總選擧運動者流計策然。被選者日可。

三復。

當今の有權者輩、眼中候補者の良否なく、唯だ黄金の多少あるのみ。議會の腐敗墮落は卽ち代議士の腐敗墮落を意味し、代議士の腐敗墮落は卽ち有權者の腐敗墮落を意味す。句あり『納凉臺嘘吐き顔の並びけり』

○

白笠を少さますや木下陰

那須野行旅。

三伏の行旅を想はしむるに足るものあるも、要するに凡句、あらずもがな。句あり『江州も來て荷をおろす清水哉』

○

まかり出たるは此藪の蟇にて候

公共團體選擧。突起者。

演壇に起てるは是れ權兵衛の伴。一句一杯、瓶中の水既に空しうして、尙ほ未だ本論に入らず。千古の名吟。句あり『降り出して蚊の鎭まりぬ一しきり』

○

雲を吐く口つきしたり蟇

大言壯語。瞞着世人者罵得。痛快。

自家廣告に巧みなる者、是れ當今の成功者と稱する輕薄才子。句あり『天下の英雄を叩き出す扇子哉』

○

赤い葉の榮耀にちるや夏木立

平清盛末路。

中七文字、情ひらくは月並臭を脱せず。句あり『花散るやぐわんともいはぬ金佛』

○

夕霧や馬の覺えし橋の穴

管仲雪路光景。

敍事精細、印象明瞭。道漸く里閭に近く、白霧迷濛、鎮守の杜仄かに黑し。ハイ〳〵と警むるは是れ馬上の人。ヒヒンと嘶くは是れ其の愛馬。句あり『道端や苅り殘されの萩が咲く』

○

秋風に歩いて逃る螢かな

秋風索莫。

『歩行いて逃る』の語、妙謂ふ可らず。追ふ者は無心の頑童、其の高く飛ばざるを見て獨り怪しむ。句あり『顔隠すにもばら〳〵の扇かな』

○

小言いふ相手もあらばけふの月

喪妻者。讀此句。誰不沾襟。

あゝ誰れか此の句を讀んで襟を沾さざる者ある。一茶の雙頰紅涙の流るゝ時、浮雲一片明鏡を蔽ふ。盧子句あり『蓑蟲の父よと啼きて母もなし』

○

連にはぐれて

一人通ると壁に書く秋の暮

枯木寒鴉圖。

落書に曰く、へへののもへじ。また曰く、同行二人雨宿りす。また更に曰く、お駒才三いろ〳〵。句あり『鋼は急げ急げと鳴くなめり』

○

木啄のやめて聞くかよ夕木魚

食蟲木啄鳥。亦生善念。

孟母三遷良に故あり。即ち是れ門前の小僧習はずして經を讀むの類。句あり『法談に行くやうそ寒さうな顔』

○

得手もの〻片足立や小田の雁

探幽蘆雁圖。殆髣髴。

得手ものは是れ一羽の白鷺、離れじと契れるは是れ鴛鴦の雌雄。也

有句あり『寐てゐるは乞食立たは案山子哉』

○

秋風やむしりのこりの赤い花

さと女三十五日墓

諳往事而憶亡女。哀痛不已。

字々涙ならざる無く、赤い花は其の紅涙をもて染めなせるもの。一茶別に句あり『末の子やお墓參りの箒持』

○

露の玉つまんで見たるわらは哉

富貴功名。看來一個露玉。英雄豪傑。看來

幾個痴兒。

白露無心、頑童無心。此に於て乎此の句此の評共に無限の趣致あり。

句あり『蓮の實は何處へ飛ぶかと聞く子哉』

○

月蝕皆既

人數は月より先へ缺にけり

薄志弱行。百事不成。

殘れる者果して幾人。諷刺骨に徹す。角呂句あり『おれに似て尻の居らぬ西瓜哉』

○

人の世は月もなやませたまひけり

聖賢有過。日月有蝕。

上に聖天子在しまし、下に明宰相のあるありて、尙ほ逆賊の出づるに會す。あゝ月のなやませ給ふ、良に故ある哉。句あり『君が代や露置き餘る草に木に』

○

酒盡てしんの座につく月見かな

餘音嫋々。

先生は詩を賦し、大人は歌を詠じ、宗匠は俳三昧に耽る。句あり『枝豆も團子も盡きて月更けぬ』

○

九月十六日正風院菊會

鍬さげて神農貌や菊の花

靖節曰。採菊東籬下。陶家風色。

東家の隱居は、是れ東坡面。西隣の老翁は是れ太白振り。句あり『冠りにとまらんとする蜻蛉哉』

○

杖先で畫解するなりきくの花

觀菊御會。禁此等擧止。蓋田家所不厭歟。

或似失禮。

蓋し野人禮に嫻はざるの類のみ。問はずして可なり。句あり『先生の顏しかめ給ふ放屁蟲』

○

鵙の聲かんにん袋きれたりな

嗚咽涙下。

其の聲を形容し得て妙を極む。群雀聲を潛むる良に故ある哉。句あり『氣短かのやけに引つ張る鳴子哉』

○

蟷螂や五分の魂是見よと

切齒扼腕。口角飛沫。看來一場滑稽。

江戸兒と稱する者、徒らに鼻柱の强き事之れに類す。句あり『投げられて小さくなりし角力哉』

○

行な雁住ばどつちも秋の暮

故君子無入不自得。

知らずや、世上鬼ばかりかは。悟入し來れば、穢土も是れ淨土。句あり『どの家の柿も眞赤に熟しけり』

○

若僧の扇面に

影法師に恥よ夜寒のむだ歩き

君子不恥屋漏的意思。說得深切。

此の一句を敢て山村水郷の青年諸君に呈す。句あり『日一日絲瓜のだらりぶらり哉』

○

老樂

小菊なら縄目の恥はなかるべし

周武王討殷紂之事。後世不免議論。

美姫多くは薄命、村娘須らく命を樂んで、他を羨まざれ。句あり『美しう咲いて芙蓉の賣られけり』

○

喧嘩すなあひみたがひの渡り鳥

一口罵競爭的世界。痛快。

獨立主義と個人主義とは、似て而して非なるもの、前者は讃す可きも、後者は斥く可し。社會生活の妙趣は、和衷協同の裡、自己の獨立心を失はざるに在り。句あり『頼まれつ頼みつ大根引き終へぬ』

○

狼は糞ばかりでも寒かな

余往年巡視蝦北。深山幽谷。見猛獸來往跡。眞個實況。

余もまた前年、北海に遊び、屢次猛獸の慘害談に心膽を寒うす。句あり『骨と皮ばかりになりし冬木哉』

○

むら千鳥そつと申せばはつと立

諧話。鄙俚々々

句品高からず、川柳と相距る遠からざるなり。一茶別に句あり『關

守が叱つて曰くばか千鳥』

○

三介が敲く木魚もしぐれけり

無心亦慕浄土。可憐々々。

三公克く心經を諳んじ、住僧病んで往く能はざるの時、代つて檀越の死者を葬る。句あり『時雨るゝや念佛講の當り番』

○

善光寺門前憐乞食

重箱の錢四五文や夕時雨

蓋敍寂寞情景。以戒肉食者也。茶翁面目可掬。

法燈影淡く、階前唯だ百度を踏む數四の男女を見るのみ。時雨心有り、値心無し。句あり『化柳枯れて乞食のうづくまる』

○

雪ちるやおどけもいへぬしなの空

余辭鄕土數年。讀此句不堪懷舊情。

句意頗る明瞭を缺く、或は前書きの存するにあらざるか。句あり『炭賣や木曾とし聞けば懐かしも』

○

彼是といふも當座ぞ雪佛

人世五十年似雪佛。毀譽褒貶非可拘。

我れは唯だ、我れの是なりと信ずる所を行へば足る。句あり『雪の原一筋道ぞ嬉れしかり』

○

餅搗が隣へ來たといふ子かな

非假設語。

隱居は春が來ると云ひ、親父は大三十日が來ると云ひ、娘は羽子板賣りが來ると云ふ。句あり『餅搗や隣り合せの刀鍛冶』

○

餅花

かまけるな柳の枝にもちがなる

憂時憤世眞無用。吟月詠月却有情。

憂ふ可きの時に憂ひ、憤る可きの世に憤るは、極めて有要の事に屬す。徒らに憂ひ、憤るを以て無用の業と爲すのみ。句あり『歌の手で餅花を咲かせけり』

○

兩國橋

寒垢離にせなかの龍の披露哉

往時都門俠客。喜文身如此。奇々。

有技藝者。有學術者。往々有此陋態。

學者の學者臭く、俠客の俠客臭く、通人の通人臭きは最も厭ふ可し。其の全く臭からざるに至りて、始めて達人の域に入る。偖ても臭い哉、甲乙丙丁。太祇句あり『河豚賣に食ふべき顏と見られけり』

○

かも川をわたらじとちかひし人さへあるにひと度籠りし深山を下りてしら髮つむりを吹れつゝ名利の地に交る

はづかしやまかり出てとる江戸のとし

翁亦有細心。

冒頭一句。見茶翁本領。

恥かしとも思はで、京女の流風を真似んとする村娘の愚や憫れむ可し。句あり『人真似の忙がし振りや師走猿』

○

小人閑居成不善

冬籠り悪く物喰を習けり

失意豪傑。有犯此禁者。政客往々皆然。

小人閑居して不善を爲し、俳人天狗となりて月並に化す。召波句あり『佐殿に文覺饅を進めけり』

○

我門に來さうにしたり配り餅

想幼時在田園時。

嘲殺世上希恩迎幸一輩人盡。

來さうにして來らず、一歩を轉じて隣の家に入る。凸坊啞然たり。句あり『成らぬ懸掛乞ばかり來りけり』

○

おのれが姿に

ひいき目に見てさへ寒いそぶりかな

顏子陋巷光景。

何んぞ其の影の淡くして、枯木の如きや。句あり『貧乏は饂の棒にも似たる哉』

○

ともかくもあなた任せのとしの暮

千古無比大悟。

補「天浴」日功業。樂「天知」命結果。

今日を樂みて今日を勉む。今日主義の妙趣は、焦せらず悲しまず、孜孜として怠らざるに在り。是れ卽ち成功の眞福音。句あり『今日は今日明日は明日とて年忘』

植木露香贈一茶俳句一夕讀了隨誦隨評興味湧然雖然余不解俳句自信評語缺妥當他日欲質識者大鑑

明治三十八年七月二十日夜

楓關千秋識

家兄楓關君寄某所贈一茶俳句以促品評余之不解俳句甚於家兄之不解隨讀隨評假以寓懷耳是非如何當否如何非所知也

明治四十一年七月中浣

品評も中位なりおらが春

弟無邊國武

渡邊家の杓子會

杓子會とは楓關翁と無邊翁とを音頭取りとして設けられた、渡邊家に於ける兄弟姉妹舅姑子女の句會である。折々は一同打集ふて運座に小首を捻らるゝ事もある。詠草中には却々に旨いのが尠くない。茲には唯だ楓關翁と無邊翁と采蘭女(楓關伯令夫人)と彩芳女(高山直純氏母堂)と夜雨子(楓關伯令嗣千春氏)と紅雲女(千春氏夫人)と默笑子(無邊子令嗣千冬氏)と靈響子(楓關伯令婿松本脩氏)と采香女(松本氏夫人)と自適子(楓關伯令婿中川良長氏)と采華女(中川氏夫人)との佳什と思ふもの數十を抄錄して置いた。

亞浪生

○

本膳にから汁を出す霙かな　楓關

行雲をつき拔きさうな幟哉

出る月に藪から棒や木兎の聲

名の知れぬ頭巾も見えて古頭巾

達摩忌や八兵衞もけふ居士衣

○　無邊

初夢をつい忘れたる氣樂さよ

廿四番花信嬉しき暦かな

木兎の思案顏なり鐘聞いて

諏訪の湖や夜頃を氷る涙かしら

よく見ればしやれた姿の海鼠哉　采蘭女

○

涼しさや澁茶にうつる宵の月
初日影のせて千里の流れかな　彩芳女

○

關取の髻に風の光りけり
石菖の枯葉をむしる日永哉
路端や竹の子二本けろり立
樹ふり枝ふり冬の木立の眼に寒し
小春日の鼬に鷄をとられけり　夜雨

○

千鳥啼て松千本の時雨哉
頭巾一つ野寺を出でぬ月の宵
達摩忌や東來の雲窓に入る
楢の火に餅花見ゆる草家かな
寒月や荒田の中の捨案山子　紅雲女

○

白魚にふくませたしや京の紅
昨日來た嫁も耕す春田哉
かなりやの餌壺の水も氷りけり　默笑

○

春光流るゝが如き柳かな

暖やうたゝ寢の足大いなる
竹の子の伸びずなりけり晝靜か
素裸に布子重ねし相撲かな
蓬萊や海老に懋する嫁ケ君　　靈響

○

探梅や寺の厨屋の袋道
世の春や獨り瘠せ行く千蕪　　采香女

○

朝めしに象牙の箸や春寒し
怖る〳〵小猫のさはる海鼠哉
井戸端に米とぎ桶や春の雪　　自適

○

霜白き山路の月や梅かほる
小按摩の足音高き夜寒哉　　采華女

○

一二輪咲いて春來る軒端哉
霜枯れし庭に又咲く野菊かな

表紙の圖案は、小峰大羽畫伯が、一茶の「おらが春」より其の俳畫の一個を畫し來つて、眞に意匠を加へたるもの、並に其の勞を謝す。

明治四十四年八月六日印刷
明治四十四年八月八日發行

著作權所有

定價金四拾五錢

編述者　白田卯一郎

發行者　小池保吉
東京市神田區錦町三丁目七番地

印刷者　金崎金平
東京市芝區愛宕下町三丁目二番地

印刷所　東洋印刷株式會社
東京市芝區愛宕町三丁目二番地

發行所　東京市神田區錦町三丁目七番地
好文堂
振替貯金口座二〇一二二番

82
733

俳諧寺一茶翁著述自書自画

おらゝの春

定價金卅錢
郵税金四錢
切手一割増

右は信州舊家の藏板俳諧寺一茶翁の著并に自書自畫木板摺の物にて一茶物中天下一品の珍本たる事は既に公評を博せる物なり故ありて暫く製本打切れ居し所此度當店より發賣する事となれり乞ふ續々御購讀有ん事を

發行所　東京神田區錦町三ノ七
振替口座二〇一貳二番　好文堂書店

本書の序として逸淵の文中に曰く

一茶一期の風雅言行共に西華にして紹王も肆をさき歌卒も膝をかゝゆべしあかはれと毛頭れいの向上の本意を失はず實に近世獨歩の俳道人とせむかこたひ同國の一之家に傳へし切か遺稿をその篇上木して逸事の速を望す　云々

又本書の跋として西馬の文中に

一之か家に勝めおける一卷物やされ言に淋しみをふくみ可笑みにあはれを蓋して人情世態無常觀想感慨す所ゐし　云々

82
783

086905-000-5

82-733

一茶俳句兄弟二色評

臼田　亜浪／編

M44

DBE-0011